

エロフレンド ~最高のペニス探しの旅~



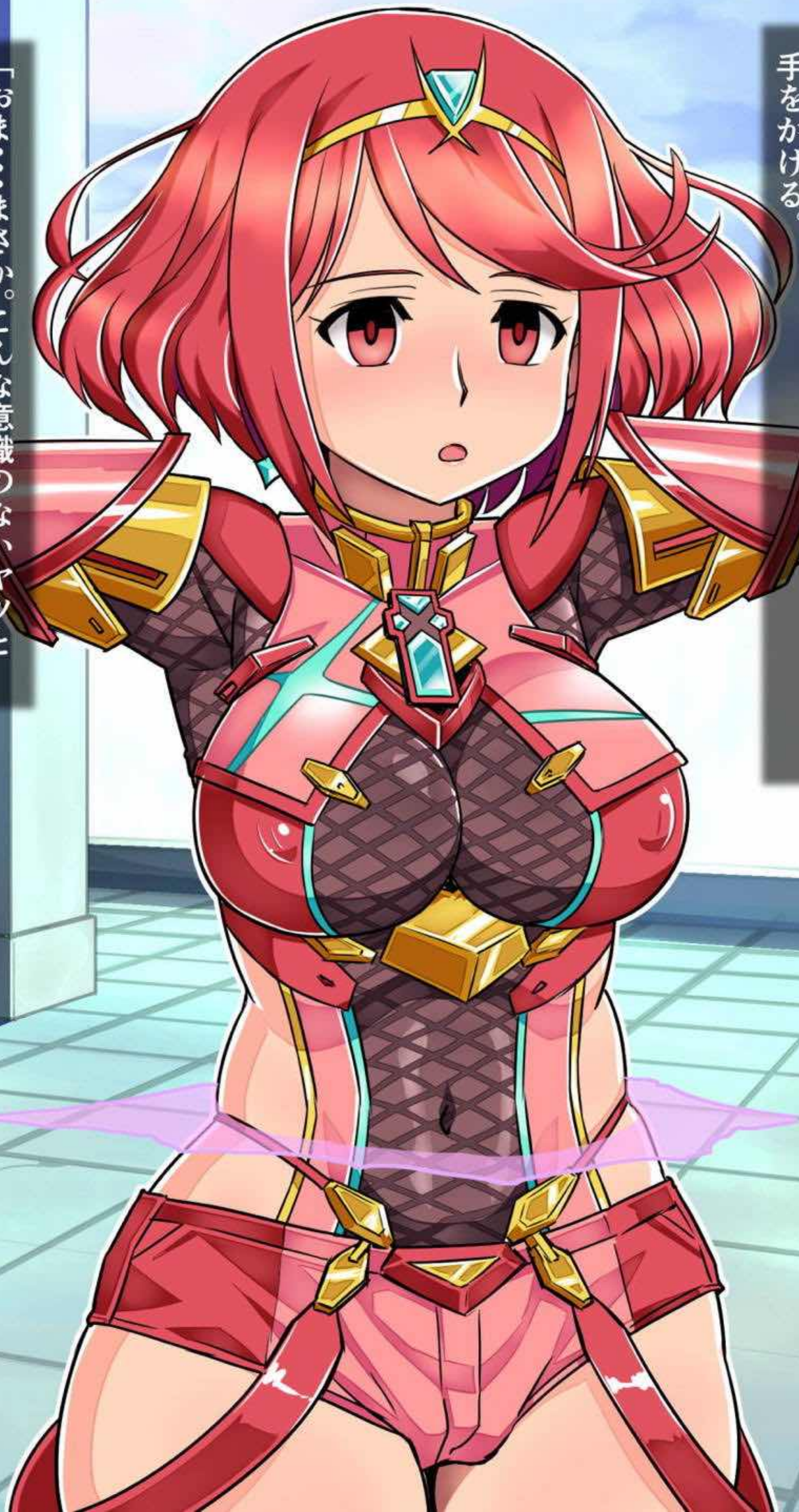
FOR ADULT ONLY

メツに捕われたホムラ。
その情報(記憶)のすべてをメツに奪われる。
「ラン、コイツはもう用済みだ、さあ帰るぞサタヒコ！」
メツは傍らに控えていた仲間のサタヒコにそう言った。

「待ってくれ、メツ！この娘は俺が貰っても？」
「ああ、いいぜ。だが何をする気だ？」
メツは顔をしかめ、サタヒコを見る。



「なにをやるか、だって？
野暮だねえ。それを聞くかい？」
そう言っつてサタヒコはホームラのショートパンツに
手をかける。



「おま…まさか。こんな意識のないヤツと
やって楽しいのか？」
やれやれといった様子でメツはそう言った。
「フ、楽しいに決まっているじゃないか！」

サタがゆっくりとホムラのショートパンツを
ずり下げていくと、局部が露出する。
「おお・・・穴あきパンスト！これならおしっこするのも
楽だし、ハメるのもすぐ出来るね！」
サタは興奮し、自分のパンツもずり下げる。

「まったく・・・つきあいきれねえよ。
俺はここで見させてもらおうぜ」
興味なさげにメツはそう言うのと、石段に腰を下ろした。



「どうよ、ホムラちゃん！俺の自慢の息子は！」
「んなところにコアを埋め込んでいるヤツは
お前以外見たことねえよ！」
「メツには感想を聞いてないよ」

サタヒコは意識のないホムラの性器に
自分のペニスをあてがう。

「大丈夫だよ、ちゃんとコアの部分は面取り
してあるからねえ。痛くないよ。」
ホムラの耳元で優しく話しかけるサタヒコだが
その声はホムラに届いていない。

ずにゆ……！
ホムラは意識を失ってはいるものの、ほどよい体温と
ぴったりと閉じた太ももでサタヒコの性器を締め付ける！

「うおお……！見た目通りの優しい感触だ！
まったり楽しむのにもってこいのマンコだな！
とここでメツ、この娘には処女膜がないようだが……」
「そんなこと、俺が知るかよ！」
激しい戦いの際に処女膜が破れてしまったのだろう。
ホムラはこのサタヒコとの性交が、初体験なのだ。

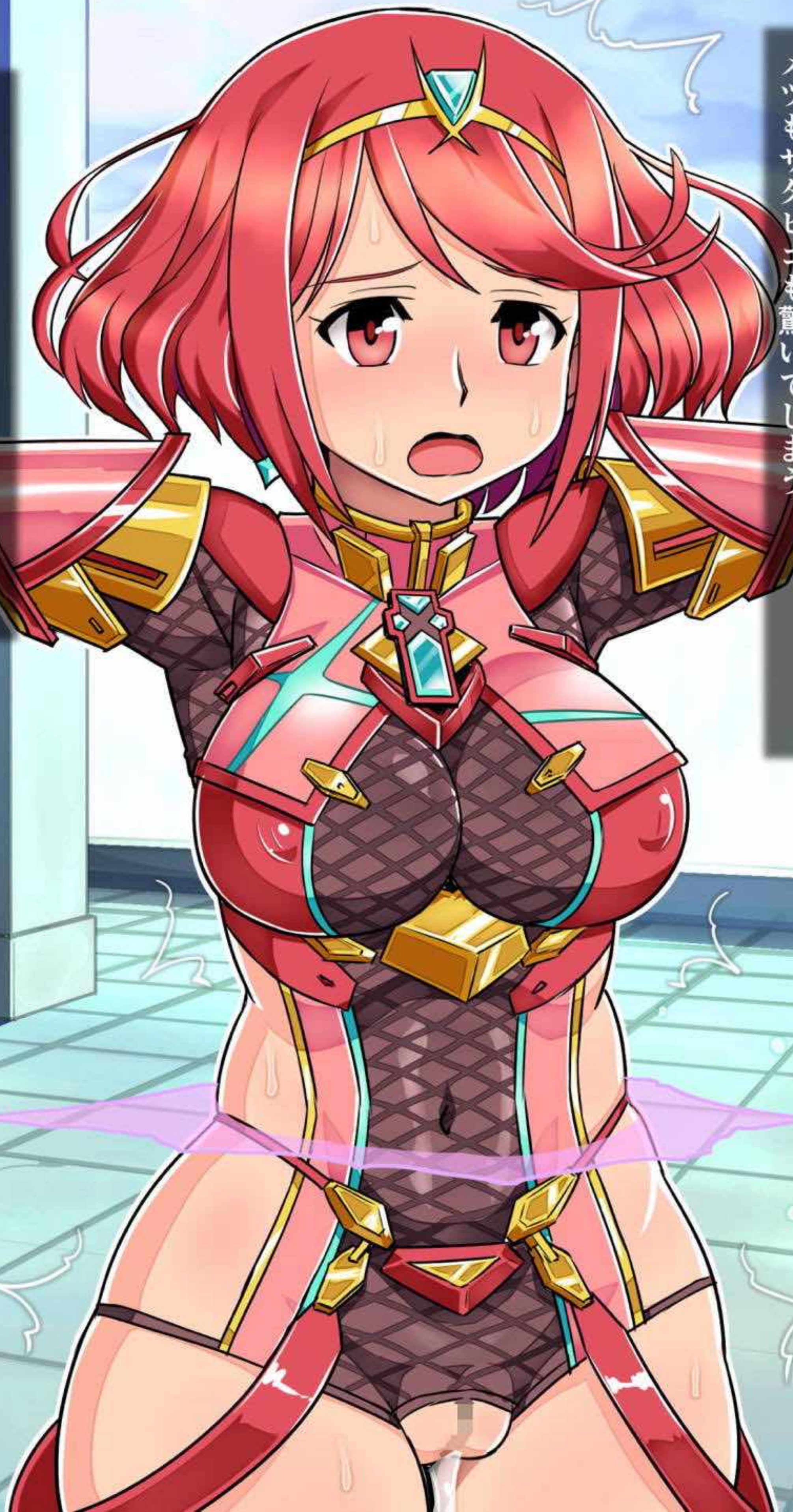


「おお、いいぞ、いきそうだ！
俺の特製ミルクをキミの膈内でたっぷり
出してあげるからね！」



「へ、へええ!?はわわ……!」
「!」「!?!」
唐突に意識を取り戻すホムラを目の当たりにし、
メツもサタヒコも驚いてしまう。

「ウソだろ?なんで意識が戻る!」
メツもいまだに状況が理解できない。



「こ、これえ♡サタヒコの情報が入ってくるぅ♡」
ホムラの卵子がサタヒコのザーメンと結合すると、ホムラのコアが
怪しく光を放つ。

「おいおい、冗談だろ。ザーメンから情報が得られるのかよ。
腐っても天の聖杯、ということか。」
これはおそらくホムラだけの特異体質なのだろう。
すっからかんになったホムラの情報に、サタヒコの情報だけが
注ぎこまれていく。



「サター！サター！私にもっとホットミルク
射精してください♡」

「んんん？！しょうがないな、もう少し遊んであげよう！
メツ、キミはやらないのか？」
サタヒコはメツにそう問いかける。

「バカか、俺の情報がコイツに抜かれるじゃねえか！
俺は帰るぜ！」

メツは吐き捨てるように言うとその場を後にした。
「ふうん、愛想のない男だねえ。じゃ、ホムラちゃん、
続きしよっか♪」
「するするう♡」



サタとセックスをし続けるホムラであったが、
レックス達によって救出される。

レックスはホムラの体を気遣い、ひとまず休息を
取るため宿を取ることにする。

ホムラが記憶をほぼ失ってしまったことを
レックスは知り、仲間達と今後の旅について相談をする。

ひと悶着あったが、まずはホムラの記憶を取り戻すため
メツとホムラを性交させるということに決まった。

そしてその夜……

そこはレックス達が泊まっている部屋とは別室。
まったく関係のない男が泊まっている部屋だ。

「な……だ、誰だアンター！」
「わたし……ヒカリです♡」

彼女の名はヒカリ、ホムラのもう一人の人格。
人格が変わると見た目も変わる。



「ねえ、せつくすしよお♡」
彼女には夢中遊行症、いわゆる夢遊病という悪癖があるが、先日セックスジャンキー・サタヒコの情報を得てしまったことで淫乱の要素が加わり、夢中淫行症へと進化してしまった。
「ちょ…そんなに挑発されると…!」
そういう男のペニスはすでにビンビンに勃起している。

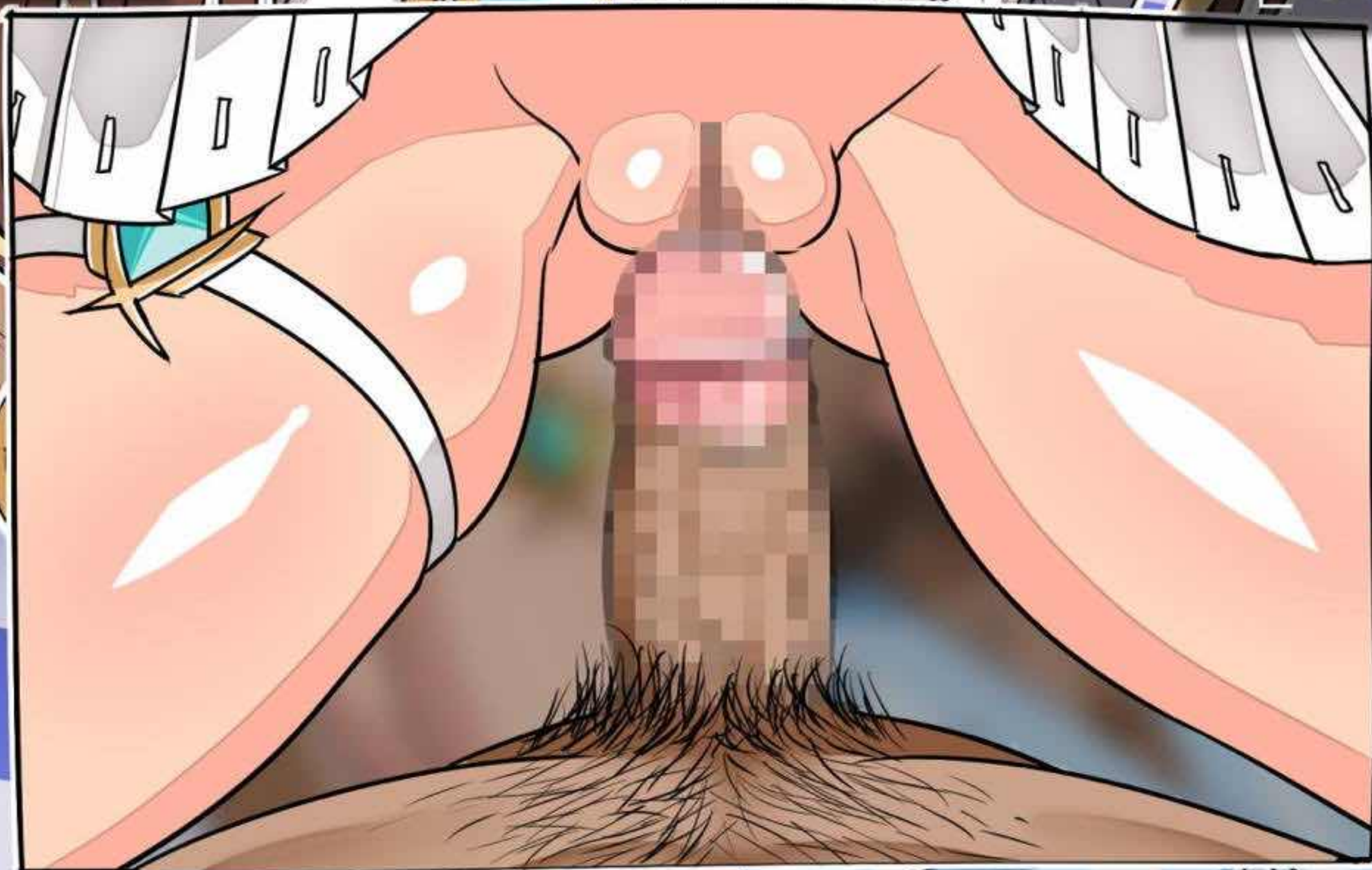
「この人寝ぼけているんじゃないよ…」
「せつくすしよお♡」
「ま、まあ断る理由もないしな、しようがないな!」



ヒカリは男のペニスを自分の股間にこすりつけ、挿入の体勢に入る。

「じ、実は僕童貞なんで……よろしくお願いします!」「よろしくおねがい……します♥」

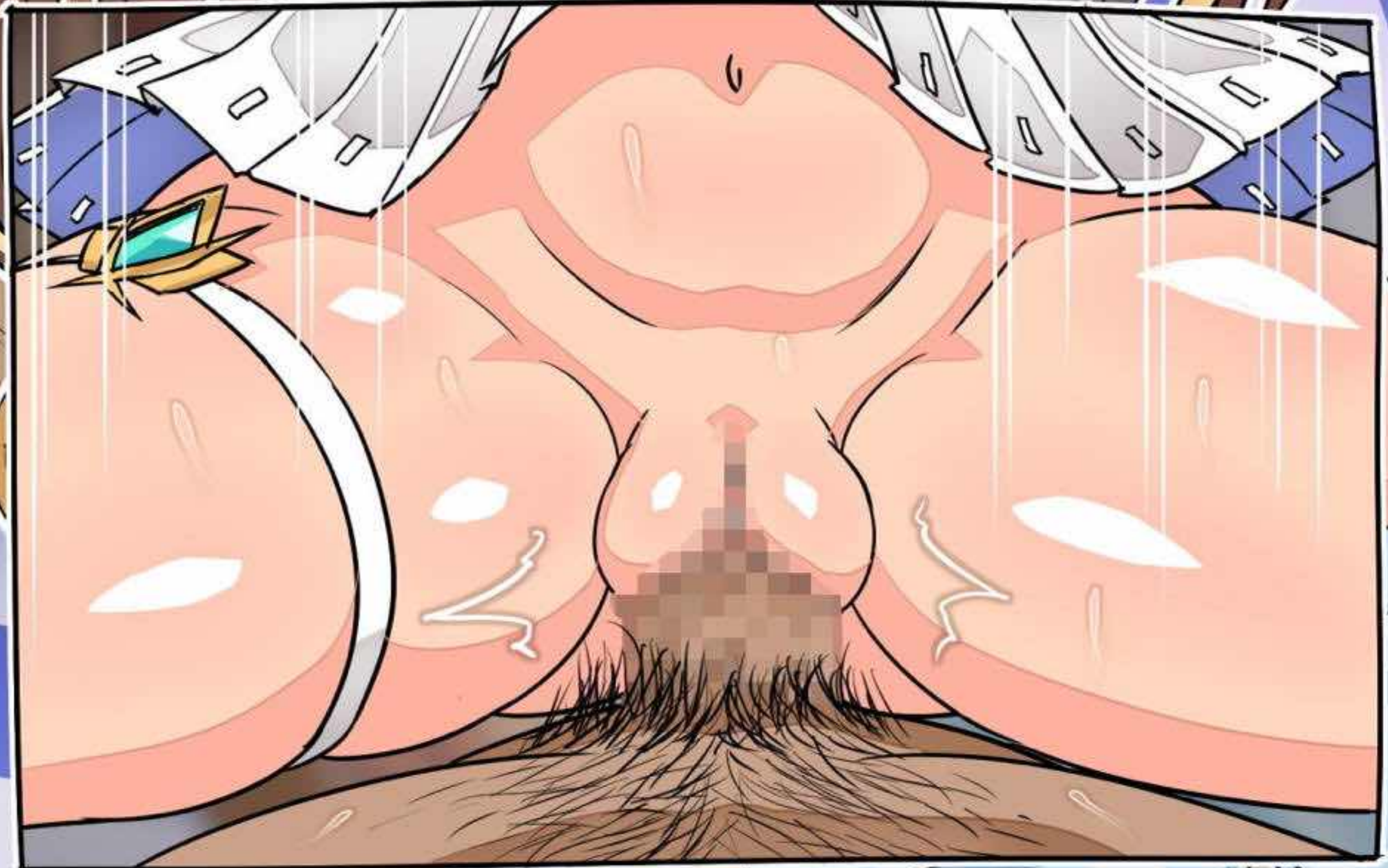
ヒカリの返事は相手の会話に合わせたものなのかそれともただのオウム返しなのか……彼女は寝ぼけているので見当もつかない。



ヒカリは容赦なく、童貞男のペニス根元まで腰を下ろす!

「う、うおお! そんな急に!」
「あ、あはあ♡はいつたあ♡」

ホムラとしてはすでにサタヒコと経験済みだが、ヒカリとしてはこれが初食いの男だ。ヒカリは名前も知らない童貞男のペニスを一生懸命貪る。



ヒカリは一層激しく腰を上下させ、
男との結合を愉しむ。
「あ、あの……もう出そうです！そろそろ抜かないと……」

だが男の悲鳴にヒカリは応じない！
確実に子種を絞り取ろうとしている。
「ああ……もうダメ……！出るッー！」



ドクツドクツ！
男の肉棒は激しく脈打ち、初めて会った女の
膣内にザーメンをぶちまける！

「きた〜♡ あったかいの♡」
「ああ… やっちゃった…」
男が悲痛な声で呟いているのとは対称的に、
ヒカリは満足げな表情を浮かべている。



「……すうすう」
すっかり満足してしまったヒカリはそのまま
寝息を立てはじめた。
「あらら、この人寝ちゃったよ……て、最初から
寝ぼけてたカンジではあったけど……。
もうこんだけ出しちゃったんだし、一回するのも
二回するのも同じだよな！」

そう言うのと男は寝ているヒカリに思う存分
膣内射精するのであった。



レックスたちとの旅で様々な苦難を乗り越え、
ついに真の力を解放したホムラ。
ホムラであり、ヒカリでもある彼女だが、覚醒した
その姿はホムラのイメーヅカラーである赤色が
ないため、仲間からは「(覚醒)ヒカリ」と呼ばれている。

その彼女を法王庁の法王が呼び出す。
「何の用?」
ヒカリはこの法王が苦手である。いや、
苦手というよりは嫌悪感に近いものを抱いている。
怪訝な表情を浮かべるヒカリに法王が口を開く。
「君にきてもらったのは他でもない。」





「私と遊んでもらうために呼び出したのだよ」
法王はそう言うと、躊躇うことなくそそり立つ
ペニスをヒカリに見せつける。

「は、はあ!? わたしがそんなこと
するわけないでしょ!」
彼女は今までに二人の男と交わったが、その
どちらも彼女の意識が正常な状態で行われた
わけではない。意識が正常な状態では当然
拒否の色も示す。

「ふふ、分かってないな。君に拒否権はない、これは命令だ！」
パチン、と法王が指を鳴らすとヒカリの体は動かなくなる。

「な……こ、これは。どうして！」
「フ、それは君が今知るべきことじゃない。今君が知るべきは、私の気持ちなんだ！」
法王はヒカリにそう熱弁する。



「ではその股当てを外させてもらおうとしよう。」
そう言うと男はヒカリの股についている布に手をかける。
「や、やめなさい！」
ヒカリはこれから行われるであろうことを自覚し、
懸命に金縛りを振りほどこうとするが、やはり身動きが
取れない！





「ほお、こうなっているのか」
それはホムラの時と同様、オープンパンストだった。
「な、なによ！わたしだっておしっこくらい
するんだから！」
至近距離で股間をまじまじと観察され、ヒカリは
恥ずかしさのあまり顔を赤らめ視線を逸らす。



「ふむ、ほどよく湿っているな…なんだ、君もまんざらじゃないようだな」
厭らしい笑みを浮かべる法王に、ヒカリは反論する！
「そ、そんなこと、ない！」
ヒカリはこの男のことを嫌っている。
だが、体に染み付いてしまったセックス中毒の情報がヒカリに男を求めさせる。



「おおお…想像通り、いやそれ以上だ！以前から君は私の母に似ていると思っていたんだ！」
男の唐突な発言をヒカリは瞬時に理解できない。
「え、それってどういう…」

「では挿れるぞ！」
「いやあ！」
男は立ったまま、ヒカリの膣内に肉棒を挿入してゆく。



「ああ、最高だよ！母さんのオマンコ！
そこでヒカリはようやく理解する。
「あ、あなた母親とそんなことを……このマザコン！」
ヒカリが今までこの男に感じていた嫌悪感の正体が
ようやく分かった。
「ああ、もっと私を叱ってくれ、母さん！」





「おお、イク！臍内ですすよ、母さん！」
「だ、だめえ！わたし、あなたのお母さんじゃない！」
だが男は止まらない、ありったけの精子をヒカリの中に注ぎ込む！

そしてヒカリが知るはずのないその男の記憶、情報がヒカリの中に入ってくるのだ。
「わ、わたし……あなたのお母さんじゃない♡」
もう一度同じセリフを言うヒカリ。それは男にではなく自分に言い聞かせるように。



「はあはあ……母さん、今度は体勢を変えてやろうよ」
「も、もう、しょうがないなあ♡甘えんぼなんだから♡」
いつしかヒカリの中にあつた男への嫌悪感は消え失せていた。





「今度は母さんに動いてもらおうかな」
「もう、しょうがないなあ♡挿れるわ♡」
ずふ…暖かい感触が男の亀頭を包み込む。
「お、おう！いいよ、動いて母さん」
「じゃあ動くね♡」

ず。ふ。ふ。……
ヒカリは男根にゆっくりと、膣内に根もとまで
入るように腰を下ろしていく。
先ほどのように法王に操られることなく、自分の
意思で法王のペニスを飲み込んでいく。

「あっ♡」
「おお……この感覚。これこそが
私の求めていたものだ！」
男は歓喜し、その様子を見てヒカリも
喜んで腰を振る。



「ああ、いいぞ母さん……もうイきそうだ！」
「イ、イクの!? はあはあ♡
お母さんも一緒にイクから膣内に出しなさい♡
ヒカリはいつそう激しく腰を振り、
男のペニスを擦りあげる！」

「ああ！イクよ母さん！孕ませてあげるからね！」
「うん♡うん♡いいよ♡
孕ませてえ♡」



「イクッ！」
「わ、わたしもっ♡」
ドク、ドクン……！またしてもヒカリの膣内に
白濁液が流し込まれる……！

そうすると、ヒカリの男への愛情が
より深いものへと変わっていく。
「ま、まだ出てるよお♡」



男が射精しきるのを確認すると、
ヒカリはゆっくりと腰を上げていく。

「よ、よくできました♡いっぱい射精して
お母さん、嬉しい♡」
「はあはあ……すごく気持ちよかったよ……」



「ねえ母さん、もう一回しようよ！
やっぱり私はこの体位が好きだなあ」
「ええ、この体位結構疲れるんだぞ
しょうがないなあ・・・♡」

それはこどもの我がままをなんでも聞く
母親のようだ。
ヒカリはすっかり法王の求める理想の
母親になってしまった。





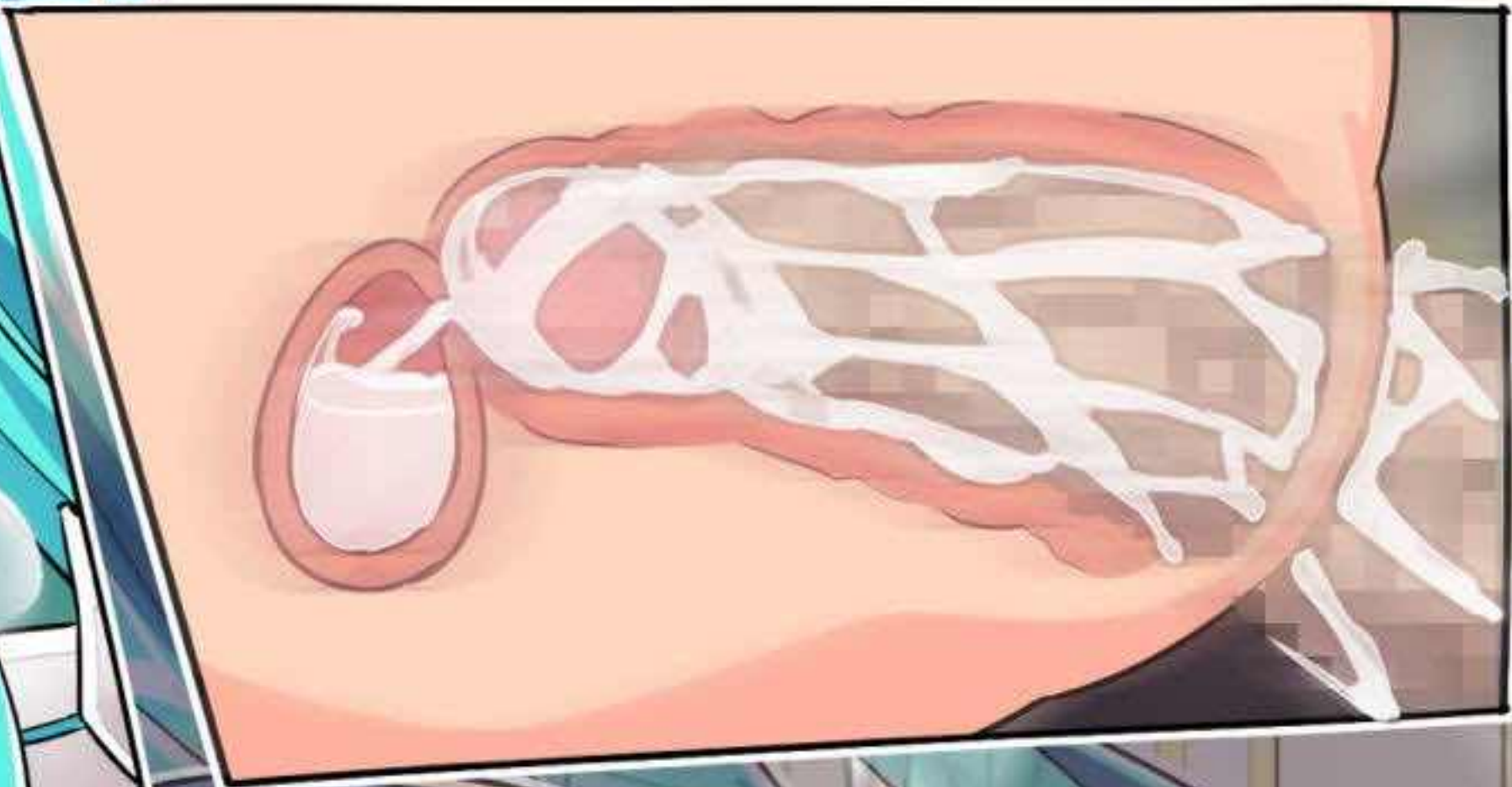
「ほら、勃起したよ母さん！」
「よ、よろし、お母さん頑張っちゃうゾ♥」
ヒカリと男はすっかり仲良しさんになって
しまった。
ヒカリは勃起した男の亀頭に自らの性器を
こすりつけ、男の望むまま騎乗位を続ける。



ぱんっ！ヒカリは勢いよく尻を叩きつける！
「おおっ！」
「あはっ♡子宮口に当たってるよお♡」
「そ、そのまま動いてくれ、母さん！」
「うん、分かった♡」



「ああ、いいよ母さん……いい重量感だ」
「も、もう！わたし、そんなに太ってないんだから
そう言っってヒカリはその大きな尻を躍動させる。
「ああ、最高だ……！」」



「イクっ!」
「きゃっ♥」
法王は腰を跳ね上げ、ヒカリの膣内
奥深くに射精する!



どろお……ザーメンを垂れ流しながら
ヒカリはうつととりとした表情を浮かべる。

「すごおい♥そんなに母さんを孕ませたいのお?」

「ああ、そうだよ。もうここに住みなよ母さん!」

そう法王に言われたヒカリだが、レックスたち

との旅はまだ続いているのだ。

「ごめんなさい、母さん仕事があるから……。でもそれが
終わったら絶対帰ってくるから!」

そう言い残し、ヒカリは法王庁を後にするのだった。

レックスとヒカリの旅は続く。

「あゝ、腹減ったなあ」

レックスは一人そう呟く。

「じゃあわたし、何か買ってってくるね！」

「え、いいの？じゃあ頼むよヒカリ！」

レックスとヒカリは物理的な距離が開くほど、
本来の力を発揮できない。

しかし単独行動を取ったとしても、天の聖杯を
脅かせるほどの者はそうそういない。

レックスはそう考え、ヒカリに買い物頼んだ。

「おーっと、待ちな嬢ちゃん！」
「なによあなたたち」
町に向かうヒカリの周りを数人の男が取り囲む。

「おい、見ろよこのコア……コイツ天の聖杯だぜ！」
「マジか、こいつは高く売れそうだぜ！」
盛り上がる男たちを尻目にヒカリが鼻で笑う。
「フ、わたしがそう簡単にやられるわけないでしょ」



「見ろ、俺の新技术^{アツ}！ブレイド封鎖！」
「そんなのわたしに効くわけが……て、ええええ!?」
「効いてる効いてるw」

この攻撃を受けるとブレイドであるヒカリは無力になる。ヒカリは油断していた。メツに情報を奪われヒカリの力は弱っているのだ。



「能力を封じればただの女の子だな」
「へへ、売る前に遊んどこうぜ！」
「おら、しゃぶれ！」
「うう……」

何日も洗っていないであろう臭気を放つ
ペニスがヒカリの柔らかい唇にあたる。
「く、臭いっ！」
「じゃあ譲ちゃんの口で洗ってくれよ！」



「な、なんでわたしが……」

文句を言いながら特に抗うこともなく
男のペニスを舐めるヒカリ。
「なんだなんだ？ 天の聖杯は経験豊富みたいだぞ？」



「うおお、なんだこのフェラ！
舌が絡みついてくる！」
男は我慢できず、ヒカリの喉奥まで
ペニスを突き入れる！」

「お、おいマジかよ。早く替わって！」
「んむう…ちゅ♡ちゅぱ♡」
男の反応にヒカリは興奮しはじめている。
サタヒコやマルベニーとの件で、性行為に
対する抵抗が薄くなっているのだ。



「な、なんだこの淫乱女！ウ、出る！」
ビュッビュッ！男はヒカリの口内で
思い切り射精する！

「んんん〜♡ごっくつ♡」
喉の奥の奥で射精され、いくらか精子を
飲み込むヒカリ。



「う、うう……」
男は射精し終えペニスを引き抜こうと
するがヒカリが吸い付いてなかなか
離そうとしない。

「んふう〜、ぬるるっ♡ちゅぷっ♡」
「お、おい、もういいって……!」
敏感になっていいるペニスを執拗に刺激され、
男は溜まらず声を漏らす。



「んふ…♡んぱあ♡」
ヒカリは口の中に残ったザーメンを
男たちに見せ付けるように口を開く。

「お、おい、なんなんだよマジでこいつ…」
「た、たまんねえ！次オレな！」
すでにヒカリを束縛していた技は解けているが
ヒカリは男たちに抵抗する意思がないようだ。



「清楚かと思いきやとんだビッチだぜ
ほら、啜えて！」
「フ、フン！あんまり調子に乗らないでよね！」

ヒカリは怒ったフリをするが、屋外でする
開放感に興奮している。



「へへ、タコみたいに吸い付きやがって……
そんなに俺のちんぽが気に入ったか？」
「フン！ちゅっ♡レロレロ♡」
「うおっ！」

ヒカリはペニスに吸い付き、口内で
その亀頭に舌を這わせる。
「こ、こいつエロすぎだよ！」



「た、たまんねえ〜!!
おほっ! おお... おほっ!」

男はヒカリの頬にペニスを突きたて、
言葉にできない快樂に悶える。



「うわっ、イクー！」
「♡」

男はヒカリの暖かい頬肉に亀頭を擦りつけ
射精する！



びゅっーびゅるっ！
ヒカリは尿道に残ったザーメンを
根こそぎ吸い出す！

「ちよ……もういいって……もう離してー！」
敏感になっているペニスを執拗に責められ、
この男も先ほどの男同様に情けない声を出す。



「ん……ごっくっ♡」
ヒカリは幸せそうな表情で
ザーメンを飲み込む。





「はあはあ……♡あ、あなた達……♡
もう終わりっていうんじゃないでしょうね！」
「え……」
ヒカリはやる気満々だ。

「このままだとマズいぜ……応援を呼ぼう！」
「あれっ!？」

狼狽^{うろた}える男たちの脚にいつの間にか鎖が
巻きついている。

「ドライバー封鎖しちゃいましたあ
逃がさないんだから♡」
ヒカリは男達の力を封じ込め、逃さない。



「はあはあ……♡わたしにちよっかい
出したこと、後悔させてやるんだから♡」
そう言っていてヒカリは男達のペニスを握りしめる。

「だ、誰だよコイツを捕まえようっていったのは！
「お、お前だろ！こいつヤベェって！」
すでに男達は仲間割れを起こし始めている。



「はっはっ♡ぺろぺろっ♡」
ヒカリは二人の男のペニスを
美味しそうに舐め始める。

「あなた達が倒れるまで搾り取って
やるんだから覚悟しなさいよね！」
「ええ〜・・・」



「ふっふっ♡ん〜♡」
「うわっ！」
ヒカリは二人の尻を抱き寄せ、
口いっぱいにてペニスをほお張る！

じゅるる…じゅぽっ！
「よ、欲張りすぎだろこの娘っ！」
「く、口の中で舌先が這いずりまわ…！」



「で…っ!」
そう言うやいなや、男たちはヒカリの
口の中に射精する!

「んっ!ごきゅっ!ちゆるっ!」
ヒカリは厭らしい笑顔を浮かべ、
ザーメンを口から垂れ流しながら啜る。




「うう…お願いです、許してください
なんでもします…」
男はヒカリに情けなく赦しを乞う。

「えい、そうなんだい♡じゃあねえ…
あと十回ずつ射精してもらおうかな♡天罰♡」

ヒカリはそう言って男達の前立腺を刺激し、
勃起させては射精させる拷問を行う。

その後、干からびた男たちを置き去りにし、
気分揚々と買出しに行くヒカリだった。





それからというものの、ヒカリの旅の
目的は変わってしまった。
性行為の楽しさに目覚めてしまった
ヒカリの旅は、より気持ちの良いペニスを
探すものとなってしまおう。

とある町の路地裏・・・ここでもまた
ヒカリは単独行動を取っていた。

路地裏には酒を飲みながらたむろ
している男たちがいる。
ヒカリはその際どい格好を男たちに
見せつけ、視線を引く。

「おい、なんつー格好してるんだよ……」

「誘ってるんじゃないか？」

「そう言ってる男はヒカリに近づく。」

「こ、こいつ痴女だぜ、間違いないええ！」



「おい、コレ……下になにもつけてないぞ!？」
よく見るとヒカリは股当てをつけてずに歩いていったのだ。

「こ、こんななの我慢できねえよ!」
男はそう言って勃起したペニスを
露にする。
あつわ



「よ、よし、挿れるゾッ！」
そうやって男はヒカリのアナルに
ペニスを挿入しようとする。

しかし酔いのせいか穴ではなく、
尻と衣服の間にペニスが入ってしまう。



「ま、間違った……でもこれはこれで……」
ぴったりとした衣服と尻肉にペニスを
挟まれ男は快感を覚える。

「まあいいか、このままですよ！」
男はヒカリの大きな尻で尻コキを始める。
ヒカリもその行為を楽しんでいるようだ。



「あ〜っ、いくっ!」
男はたまたらずヒカリの衣服の中で
イってしまおう。

「あはっ♡あったかくてニユルニユルしたの
出てるっ♡」
尻の上でペニスに脈打つのを楽しむヒカリ。



「すっげ……気持ちよかった……」
男はヒカリの尻でコいた後、地面に
寝転がり眠ってしまった。

「もう、だらしがないんだから……
ねえ、そっちのあなたも遊ぶでしよ？」
ヒカリはもう一人の酔っ払いも誘惑する。



ヒカリは近くにあったベンチに
四つん這いになるともうひとりの
男が近づいてきた。

「この娘の尻、そんなにいいのかよ。
俺はちゃんとアナルでやらせてもらおうぜ！」
男はそう言ってヒカリのアナルにペニスを当てる。





「ア、アナルは初めてなんだから優しくしてよね！」
「マジかよ、見ず知らずの相手に初めてを捧げる
なんて、とんだビッチぢだな！」
知らない男にビッチと言われ、ヒカリは興奮する。
ずぷぷ……！男はゆっくりとアナルに挿入していく。
「おお、たしかにこれは……」

ヒカリの温ぬくもりが男のペニスに伝わってくる。





「うおお、いいぞお！」
男はペニスを根本まで挿入する！
「な、なにこれえっ体が痺れるうっ♡」
すでに子宮^{ポルチオ}腔部を開発されているヒカリは
アナルからでも絶頂する。

「こ、この娘ホントに始めてかよ
才能あるぜ！」




「出るッー！」
「あっ♡」
すでにいきっぱなしのヒカリのケツ穴に
男は射精する！



「あゝ、気持ち良かった♪」
男はペニスを引き抜き、ザーメンまみれの
亀頭をヒカリのパンストに塗りたくる。

「ねえ、友達集めるからさー、一緒に遊ぼうよ！」
男は宿屋を指差し、ヒカりに同意を求める。
「え、うん…遊ぶ遊ぼう〜♡」





ヒカリは男に連れられ、ホテルの一室に入る。
そこにはその男の仲間が待っていた。
皆厭らしい薄ら笑いを浮かべている。
「じゃあ始めましょよ♡」
ヒカリはベッドに寝転がる。



「じゃあフェラしてもらえるかな?」
「え、いいけど…もっと気持ちいいことしない?」
「もっと気持ちいいこと?」
ヒカリの予想外の返答に男は戸惑う。
「どんなことをするの?」



「じゃーん♪オナホールを使いま〜す♡
「うおっ！」
どこから出したのか、ヒカリは貫通式オナホールを
男のペニスに被せる。
「オナホ使いながら亀頭舐められると気持ち
いいんだって♡」



ヒカリはオナホールでペニスを扱きながら
フェラをする。
「う、うわああ！なんだこれ、気持ちよすぎ！」
「えへへえ♡いつでもピュッピュッしていいよ♡」
ヒカリは男の反応を見て楽しんでる。



「イクっ！」
「♡♡♡」
男はたまらずヒカリの顔にぶっかける。

「ちよ、超きもちよかったよ……」
「尿道に残ったザーメン吸いだして
あげるね♡」
「お、おお……」





「隙あり！」
「あはぁん♥」
夢中でフェラをしているヒカリのマンコに
別の男が肉棒を突き立てる！




パンパンッ！途中から参戦してきた
男にハメられながらヒカリは再びペニスを
しゃぶる！

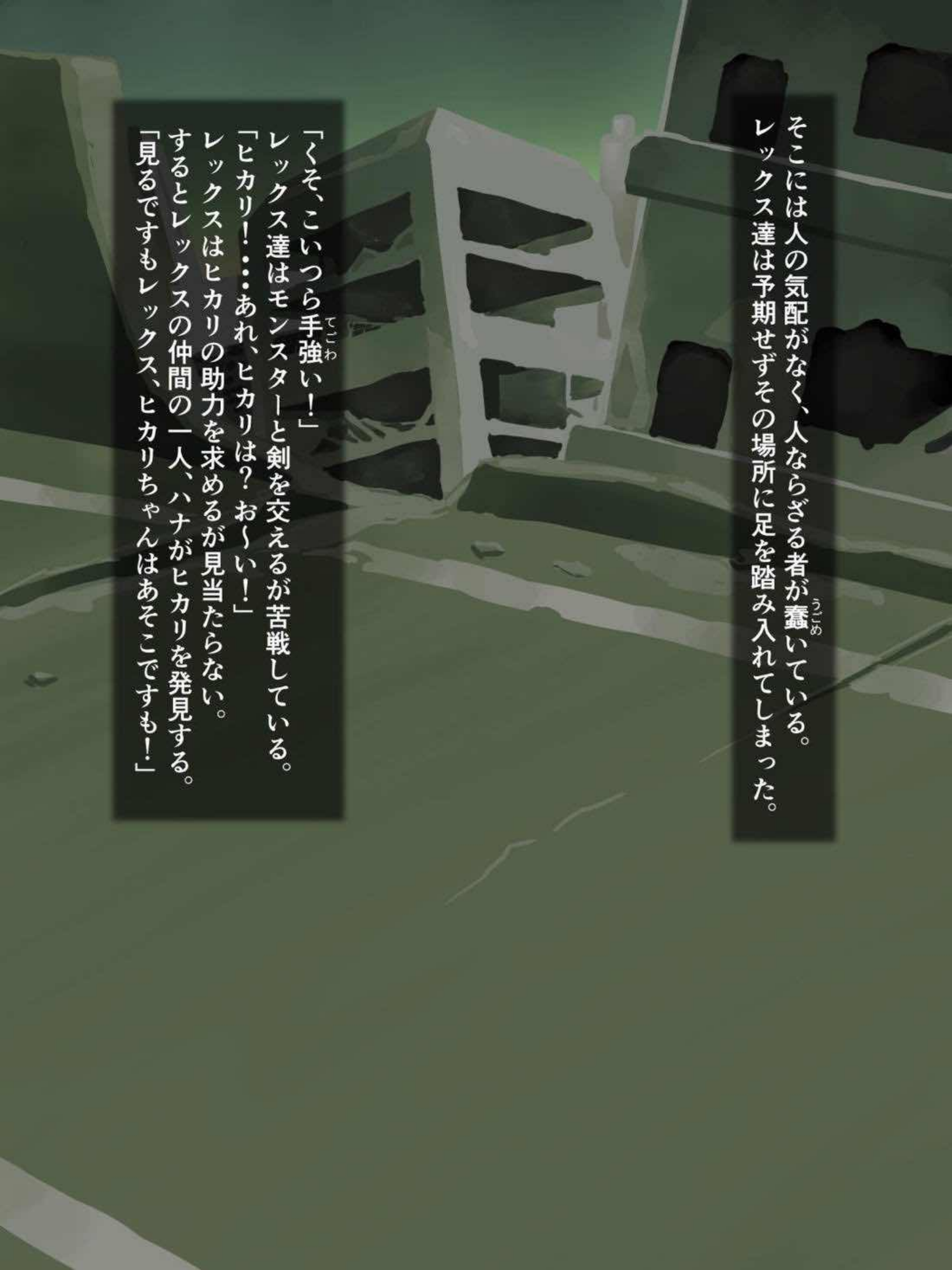
「ねえねえ、膣内なかに出している？」
「いいよいいよお♡」



「はあはあ……オラ！」
どぴゅっどぴゅっ！バックからヒカリと
性交する男が膣内に射精する！
「すっごい♥き、きもちいいよお♥」
ヒカリはペニスに囲まれご満悦だ。



「はあはあ……あー、楽しかった♡」
「俺らも堪能したよ、またこの街にきたら
ぜひおいでよ、歓迎するから。」
「うん、そうする♡じゃあね♡」
ヒカリはセックスを満喫し、その場を後にした。



そこには人の気配がなく、人ならざる者が蠢うごめいている。
レックス達は予期せずその場所に足を踏み入れてしまった。

「くそ、こいつら手強てこわい！」

レックス達はモンスターと剣を交えるが苦戦している。

「ヒカリ！……あれ、ヒカリは？ おおい！」

レックスはヒカリの助力を求めが見当たらない。

するとレックスの仲間の一人、ハナがヒカリを発見する。

「見るですもレックス、ヒカリちゃんはあるところですよ！」

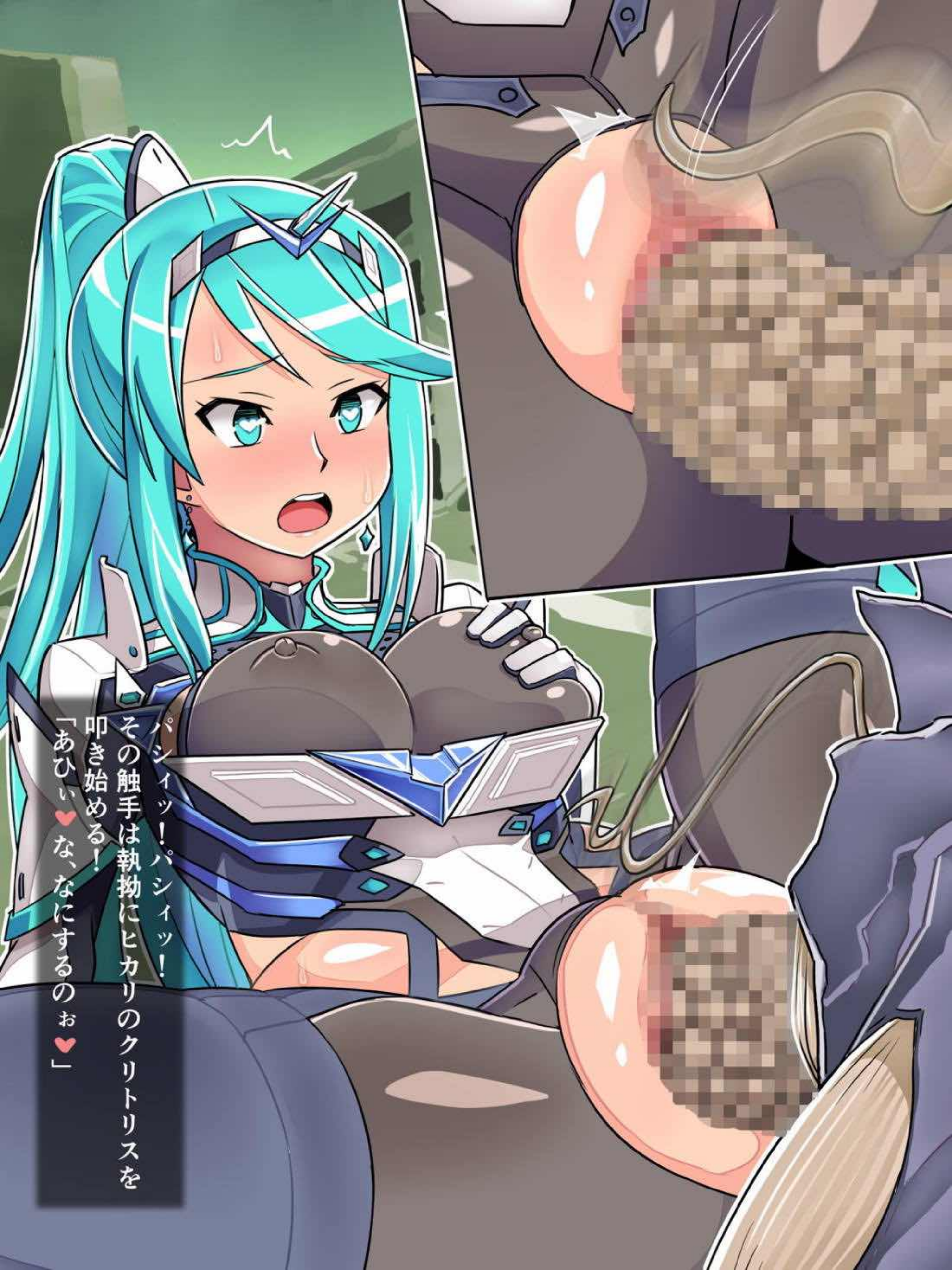
レックスの視線の先、そこにはモンスターと性器を交えようとするヒカリの姿があった。「な、なにやっつてんだよヒカリ！く、くそ！こいつら、邪魔するな！」
ヒカリのもとへ駆けつけようとするレックスだが、他のモンスター達がそれを阻止する。

「す、すごおい♡ペニスみたいなのがウネウネしてるうは、はあはあ…これ、どんなカンジなのかな…」
ヒカリの視線はモンスターのペニス状のものに釘付けだ。



ずふ……！モンスターのペニスがヒカリの膣内に入ってくる。
「……！こ、これ、膣内^{なか}でウネウネ動いて気持ちいい♡」
そのモンスターは腰を動かすまでもなく、自在にペニスを
動かしたり回転させることができるようだ。

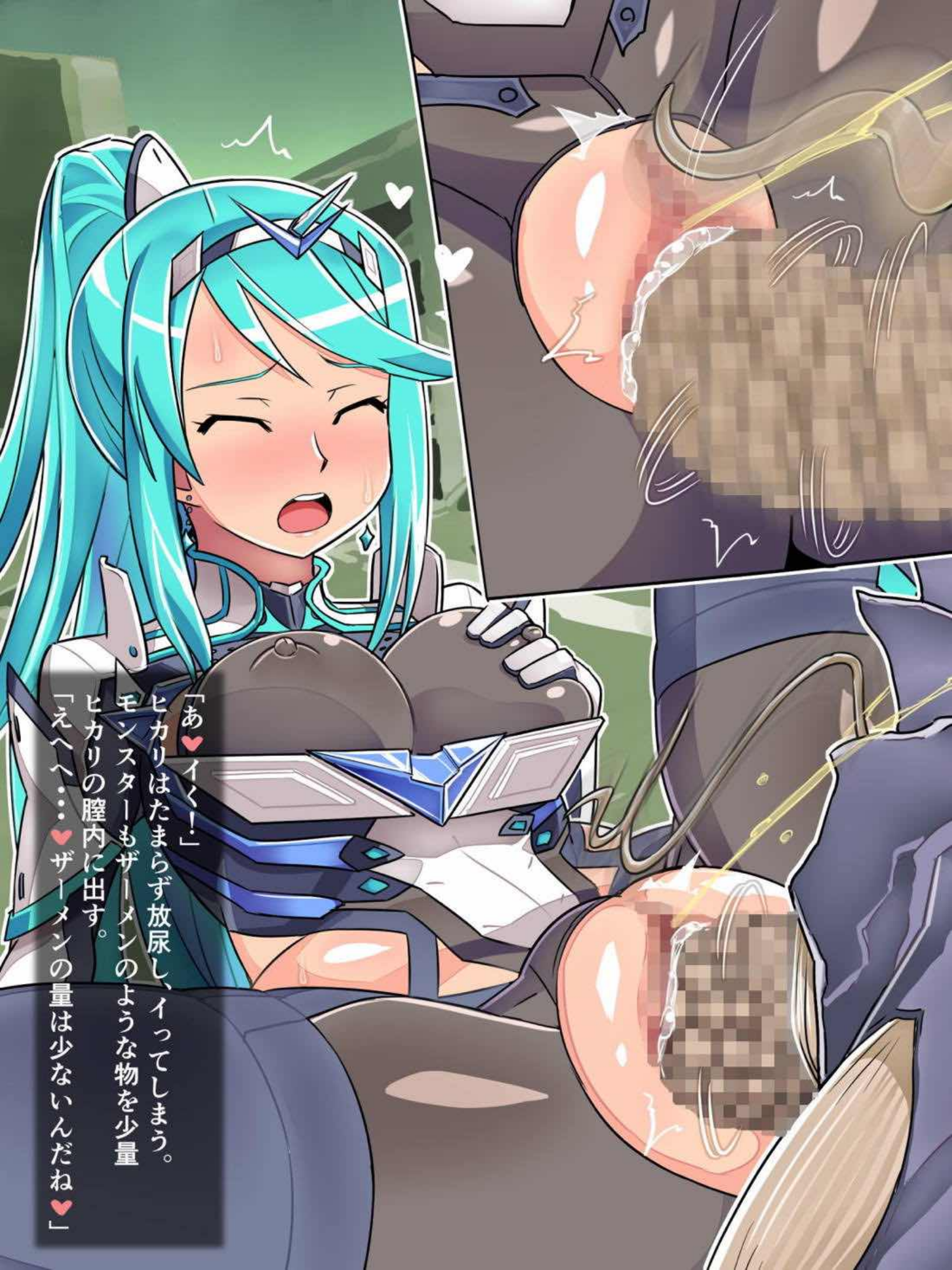
ヒカリが自分の胸を揉みしだきながら悶えていると、
モンスターの腹部から触手が伸びてくる。



「あひい♥な、なににするの♥」
パシイッ!パシイッ!
その触手は執拗にヒカリのクリトリスを
叩き始める!



ヒカリの膣内でモンスターのペニスが
ランダムに右回転、左回転し、触手は
一層激しくクリトリスを攻撃する。
「う、うう……このコ今までで一番
スゴいかも……」
一生懸命快樂に耐えるヒカリ。



「あ♥イクー！」

ヒカリはたまらず放尿し、イってしまおう。

モンスターもザーメンのような物を少量

ヒカリの膣内に出す。

「えへへ……♥ザーメンの量は少ないんだね♥」

だがモンスターのはそれはザーメンではなかった！
子宮口を柔らかくするための液体だったのだ！
「え、なに：：？」
ヒカリの子宮口をこじ開け、さらに奥深くモンスターの
ペニスが入ってくる：：！



「ちよ……！これ無理！無理だからっ！」
さすがのヒカリも初めての子宮攻めには
苦戦している。





「オ……オ……！」
初めてモンスターから呻き声が漏れた、
その瞬間。今度は本物の精液をヒカリの
子宮内で射精する。
「あ♥す、すごい量の精液がはい……い……いっ……いっ……！」



「な、なにこれえ……」
いつものように相手のコア情報がヒカリの脳に送られてくる。
だがそのモンスター情報の情報はバグだらけでヒカリはおかしくなってしまう。
「あ、あひい！きやあ♥な、なになに!?またイっちゃ……♥」
ヒカリはモンスターの情報を受け取った後、連続で絶頂し続ける!



「あ、あへえ……も、もうムリ……またイ……ッ」
「レックスス……ヒカリちゃん、もう限界ですも……!」
「ヒ、ヒカリ……よし、みんな!敵はあらかた倒したから
ヒカリを連れて早くここを出よう!」
「お、おう!」



無事ヒカリを連れて脱出したレックス達。
しばらく休むとヒカリは意識を取り戻す。

ヒカリはレックスにこっぴどく叱られるが、
彼女のセックス中毒はこの後も治ることはないだろう。

メツから情報を奪い返すヒカリたちの旅は
まだまだ続きそうである。

～終わり～



今日も一人の男性がヒカリに捕まった。
「あなたのおちんぽはどんなカンジなのかな〜、どきどき」

「う、うん♥いい固さね
長さも申し分ないわ♥」



「ん、ん〜♡ふっふっ♡」
ヒカリは夢中で腰を動かす。





どぴゅっ！男性はたまらず射精する！
「わ、わたし・・・おちんちんがおまんこの中でビクンビクン
脈打って果てていくのが可愛くてたまらなく好きなの♡」



「は、はあはあ……中出しありがと♡」